



第2章

質問紙調査の再分析

第2章 質問紙調査の再分析

第1章でも概観したように、90年代半ば以降の急速な携帯電話の普及によって、携帯電話はもはや我々の生活の一部となってきた。現代の日本社会においては、子どもたちも幼いころから携帯電話を身近にして育てている。こうしたなか、小学生や中学生の携帯電話の利用実態はどのようになっているのだろうか。また、子どもたちが携帯電話にどのような意識を抱いており、利用者の特徴はいかなる傾向を示すのだろうか。

また、携帯電話とならんで我々の生活の一部になりつつあるパソコンは、子どもたちにどのくらい浸透しているのだろうか。また、その利用者の特徴は、どのように描き出すことができるのだろうか。パソコンは、それ自体のデジタル機能（文書作成・画像処理編集・データ整理など）に加え、インターネットを通じたメールや情報のやり取りによって、自分の見知らぬ不特定多数の人々とまで交信することを可能とした。こうした多様なパソコン機能は、利用者が増加するにつれ、子どもたちにも多大な影響を与えていると推測できる。

そこで本章では、ベネッセ教育研究開発センターが、小学4年生～高校2年生を対象に、2004年に実施した「第1回子ども生活実態基本調査」（以下、「生活実態調査」）について、携帯電話とパソコンの利用状況を中心に再分析を行い、考察を加えていきたい。

1. 調査の概要

（1）調査の目的

「生活実態調査」の調査目的

毎日の生活の様子や、親や友だちとの関係、学習の様子など、子どもたちのベーシックな生活の実態・意識をとらえる。

本報告書における位置づけ

子どもを対象に実施した既存の調査データを、子どものICTメディアの利用を軸にして再分析し、定量的な側面から、子どものICTメディアの利用実態および利用環境を把握する。

（2）調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査。

(3) 対象者条件と抽出方法

対象者条件

小学 4 年生～高校 2 年生。

抽出方法

市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法。

(4) 調査時期

2004 年 11 月～12 月。

なお、以上の「生活実態調査」の概要を一覧にすると、表 2 - 1 - 1 の通りである。

表 2 - 1 - 1

調査概要	調査テーマ	毎日の生活の様子や、親や友だちとの関係、学習の様子など、子どもたちのベーシックな生活の実態・意識をとらえる。
	調査方法・調査時期	学校通しの質問紙による自記式調査（2004 年 11 月～12 月）
	調査対象	小学 4 年生～高校 2 年生 合計 14,841 人（有効回答数） *以下、小学 4 年生を「小 4 生」、中学 1 年生を「中 1 生」のように表記。
	サンプル抽出法	市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法
	サンプル数	小 4 生（1494 人） 小 5 生（1399 人） 小 6 生（1347 人） 中 1 生（1521 人） 中 2 生（1404 人） 中 3 生（1625 人） 高 1 生（2897 人） 高 2 生（3154 人）
	学年構成	小学生（小 4 生 35.2%、小 5 生 33.0%、小 6 生 31.8%） 中学生（中 1 生 33.4%、中 2 生 30.9%、中 3 生 35.7%） 高校生（高 1 生 47.9%、高 2 生 52.1%）
回答者属性	性別構成	小学生 男子（51.2%） 女子（48.6%） 中学生 男子（50.1%） 女子（49.5%） 高校生 男子（52.4%） 女子（47.1%）
	地域構成	小学生 大都市（34.4%） 中都市（35.2%） 郡部（30.3%） 中学生 大都市（32.9%） 中都市（32.0%） 郡部（35.0%） 高校生 大都市（28.2%） 中都市（24.7%） 郡部（47.1%）

* 「第 1 回子ども生活実態基本調査」の全体的な内容については、以下の冊子を参照のこと。

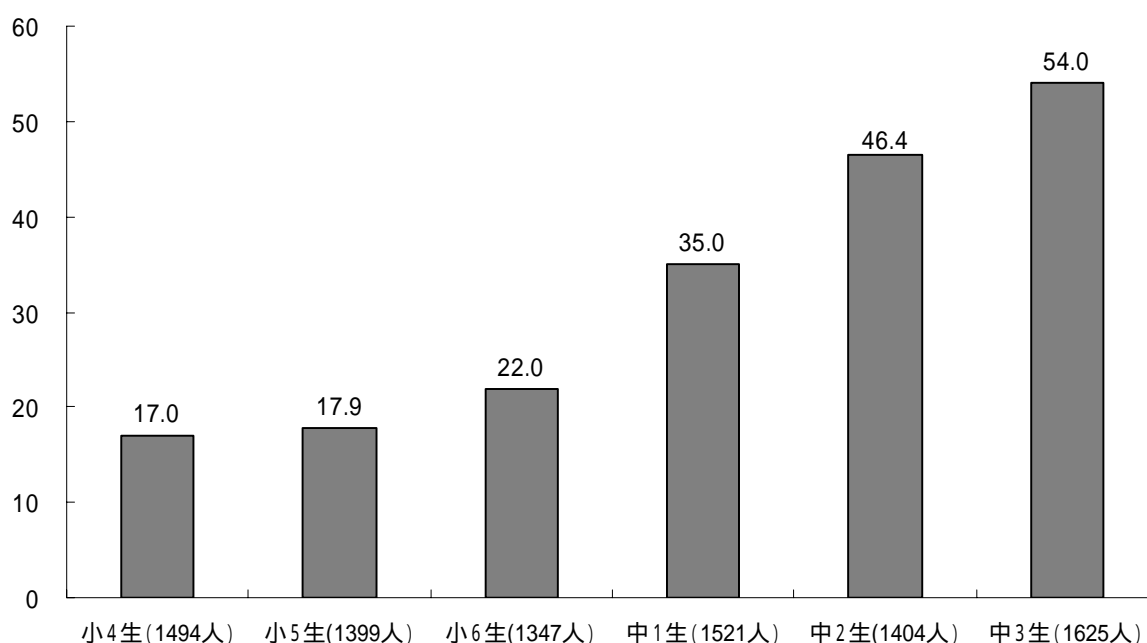
- ・ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第 1 回子ども生活実態基本調査速報版』。
- ・ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第 1 回子ども生活実態基本調査報告書』。

2. 小・中学生の携帯電話の利用状況

(1) 携帯電話の所持率

はじめに、本調査における「小・中学生の携帯電話所持率」を確認しておこう。「あなたは携帯電話（PHSを含む）をっていますか」との設問で所有状況をたずねたところ、「もっている」と回答したのは、小学生で18.9%、中学生で45.3%である。小学生に比べ、中学生になると所持率は倍になるが、さらに細かく学年別に見ると、中3生では半数が所持している（図2-2-1）。また、性別でみると、小・中学生ともに、男子より女子の所持率が高いことが分かった（表2-2-1）。

図2-2-1 携帯電話所持率（学年別）（%）



*携帯電話を「もっている」の%。

*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

表2-2-1 携帯電話所持率（学校段階別・性別）（%）

小学生		中学生	
男子	女子	男子	女子
(2172人)	(2062人)	(2278人)	(2254人)
16.3	21.6	39.1	51.4

*携帯電話を「もっている」の%。

*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

(2) 携帯電話の利用目的

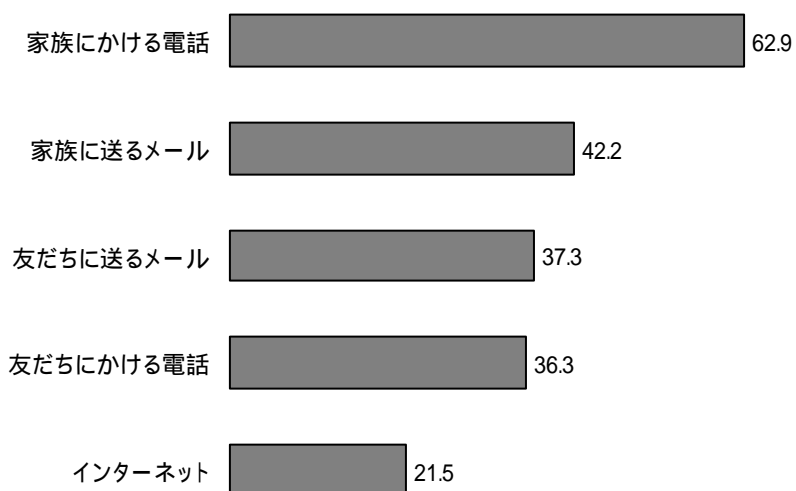
続いて、携帯電話をもっている子どもに対して、利用目的別に一日のうちで携帯電話をどのような目的で使うのかをたずねた。図 2 - 2 - 2 と図 2 - 2 - 3 は、学校段階別にそれぞれの利用目的別項目において、一日に「1 回以上使う」と回答した者（「1 ~ 2 回くらい」「3 ~ 5 回くらい」「6 ~ 10 回くらい」「11 ~ 20 回くらい」「21 回以上」と回答した合計）の割合を降順で示したものである。

小学生全体の利用頻度は高くないが、所持者の利用目的をみると「家族にかける電話」がもっとも多い。次いで「家族に送るメール」が続く。小学生において携帯電話は、家族との連絡、あるいはやり取りといったコミュニケーションツールとしての機能を、第一義的に果たしているようだ。家族とのやり取りに続いて、「友だちに送るメール」や「友だちにかける電話」という利用目的が並ぶ。携帯電話からのインターネット利用は、21.5%であった。

一方で、中学生になると携帯電話の利用目的が変化し、「友だちに送るメール」を送る割合がもっとも高くなる。すなわち、中学生の携帯所持者で、9 割近い者が友だちとのメールのやりとりを一日に 1 回以上行なっているのである。「友だちにかける電話」が、38.3%であることを鑑みれば、中学生にとって携帯電話は、友だちとの文字を介したコミュニケーションツールとしての役割を担っているといえる。次いで、「インターネット」の利用が続き、「家族に送るメール」「家族にかける電話」となっている。

図 2 - 2 - 2 小学生：携帯電話の利用目的

(%)



*小学生 (801人)

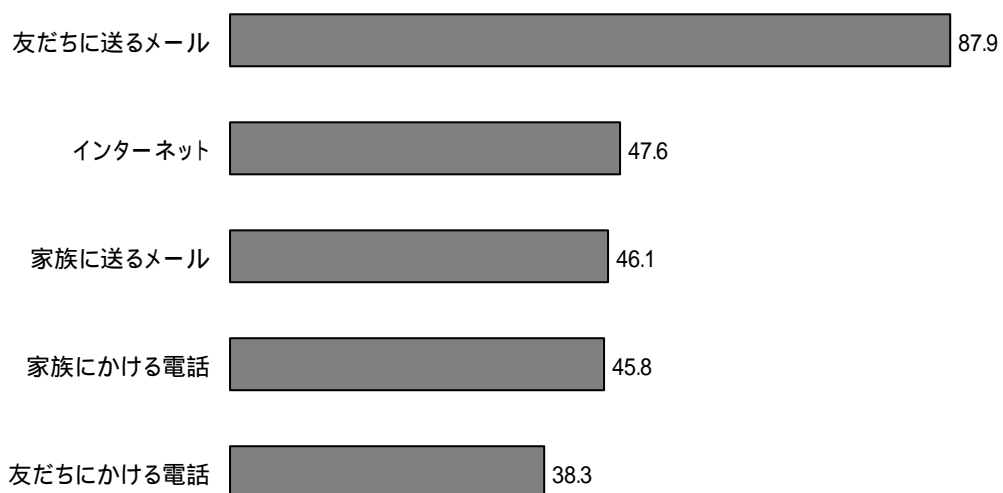
*携帯電話を「もっている」と回答した者のみ。

*一日のうち携帯電話をどのくらい使うかという質問に「1～2回くらい」「3～5回くらい」「6～10回くらい」「11～20回くらい」「21回以上」と回答した合計 (%)

*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

図 2 - 2 - 3 中学生：携帯電話の利用目的

(%)



*中学生 (2061人)

*携帯電話を「もっている」と回答した者のみ。

*一日のうち携帯電話をどのくらい使うかという質問に「1～2回くらい」「3～5回くらい」「6～10回くらい」「11～20回くらい」「21回以上」と回答した合計 (%)

*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

こうした携帯電話の利用目的には、性別で大きな差がみられた(表 2 - 2 - 2)。傾向として、女子の方が携帯電話をコミュニケーションツールとしてよく利用しているようだ。そのなかでも、とくに小学生で、男子よりも女子の方が文字によるコミュニケーションに積極的なようである。「友だちに送るメール」でも「家族に送るメール」でも、女子によるメール機能の利用割合は高い。携帯電話の多くが、通話機能のみならず文字メッセージの交換機能を搭載していると思われるが、女子はそうした機能に関心を持ち、実際に利用していることがわかる。

表 2 - 2 - 2 携帯電話の利用目的(学校段階別・性別) (%)

	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
	(354人)	(446人)	(890人)	(1158人)
友だちに送るメール	20.1	51.2	83.0	91.7
友だちにかける電話	31.3	40.3	41.5	35.7
家族に送るメール	31.3	50.8	41.8	49.4
家族にかける電話	55.6	68.5	46.5	45.2
インターネット	19.5	23.0	44.3	50.2

*携帯電話を「もっている」と回答した者のみ。

*一日のうち携帯電話をどのくらい使うかという質問に「1～2回くらい」「3～5回くらい」「6～10回くらい」「11～20回くらい」「21回以上」と回答した合計(%)。

*ベネッセ教育研究開発センター, 2005, 『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

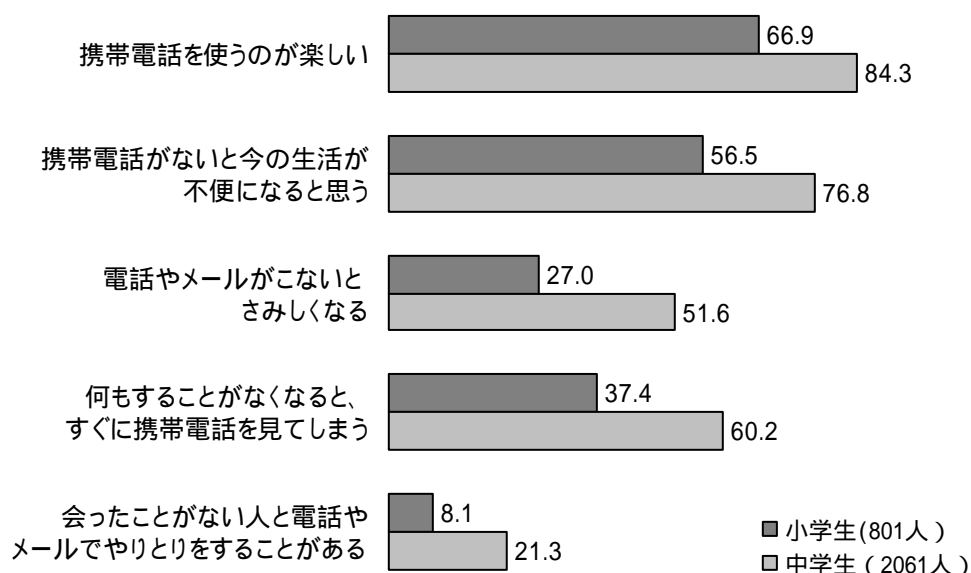
(3) 携帯電話の利用に関する意識

子どもは携帯電話に対し、どのような評価やイメージを有しているのだろうか。携帯電話の所持者のみに対して、「携帯電話について思うこと」を5項目でたずねた結果が、図2-2-4である。各項目に対し、「とてもそう」と「まあそう」と回答した合計の割合が、学校段階別に示されている。

小学生と中学生の両方でもっとも回答率が高いのは、「携帯電話を使うのが楽しい」(小学生66.9%、中学生84.3%、以下同様)である。次いで、「携帯電話がないと今の生活が不便になると思う」(56.5%、76.8%)があげられ、携帯電話を所有する小・中学生は、概してポジティブに携帯電話を評価しているようだ。

だが一方で、「何もすることがなくなると、すぐに携帯電話を見てしまう」(37.4%、60.2%)、「電話やメールがこないとさみしくなる」(27.0%、51.6%)の項目では、中学生の回答が5割を超えており、いわゆる「携帯依存」を想起させる。さらに、携帯電話利用の危険性とも関連する「会ったことがない人と電話やメールでやりとりをすることがある」も、小学生が8.1%、中学生が21.3%となっており、その利用実態については、詳細な検討が必要であろう。とくに所持率が高まる中学生の比率が、いずれの項目でも小学生を上回っている。

図2-2-4 携帯電話について思うこと(学校段階別) (%)



* 携帯電話を「もっている」と回答した者のみ。

* 「とてもそう」と「まあそう」の合計(%)。

* ベネッセ教育研究開発センター、2005、『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

(4) 携帯電話を所持する子どもの特徴：放課後の過ごし方

それでは、携帯電話の所持者と非所持者には、どのような特徴がみられるのだろうか。携帯電話の所持別の傾向をさまざまな角度から浮き彫りにしてみよう。ここでは、小・中学生の放課後の過ごし方をたずねた項目に焦点をあててみていくことにする。

携帯電話の所持者・非所持者別に、「平日（学校がある日）の放課後に、どのようなところで遊ぶのか」をたずね、「遊ぶ」（「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計）と回答した割合を、学校段階別に表したのが、図 2 - 2 - 5 と図 2 - 2 - 6 である。

小学生と中学生の行動範囲には相異があると考えられるものの、総じて携帯電話を所持している者の方が、「本屋やビデオ屋」「コンビニやスーパーなどの近所のお店」「ゲームセンターやカラオケ」「ファーストフード店やファミリーレストラン」「デパートなどがある繁華街（大きな街）」など、消費文化に近い遊び場を回答する割合が高くなっている。小学生においては、「自分の家」「友だちの家」「公園や広場など」「学校の運動場」などの身近な場所を遊び場にする傾向があり、消費文化に近い場所を遊び場としている割合は低い。

しかしながら、中学生では、消費文化に近い場所で遊ぶ割合について、携帯電話をもっている者ともっていない者との回答には、10 ポイント以上の差が生じている。差の大きい項目からみていくと、「ゲームセンターやカラオケ」（携帯電話所持者 32.4% > 携帯電話非所持者 13.6%、以下同様）、「コンビニやスーパーなどの近所のお店」（30.5% > 18.5%）、「ファーストフード店やファミリーレストラン」（18.3% > 6.3%）、「デパートなどがある繁華街（大きな街）」（22.9% > 11.7%）となっている。中学生段階では、携帯電話の有無によって放課後の過ごし方、とくに消費文化への接触に差があるといえよう。

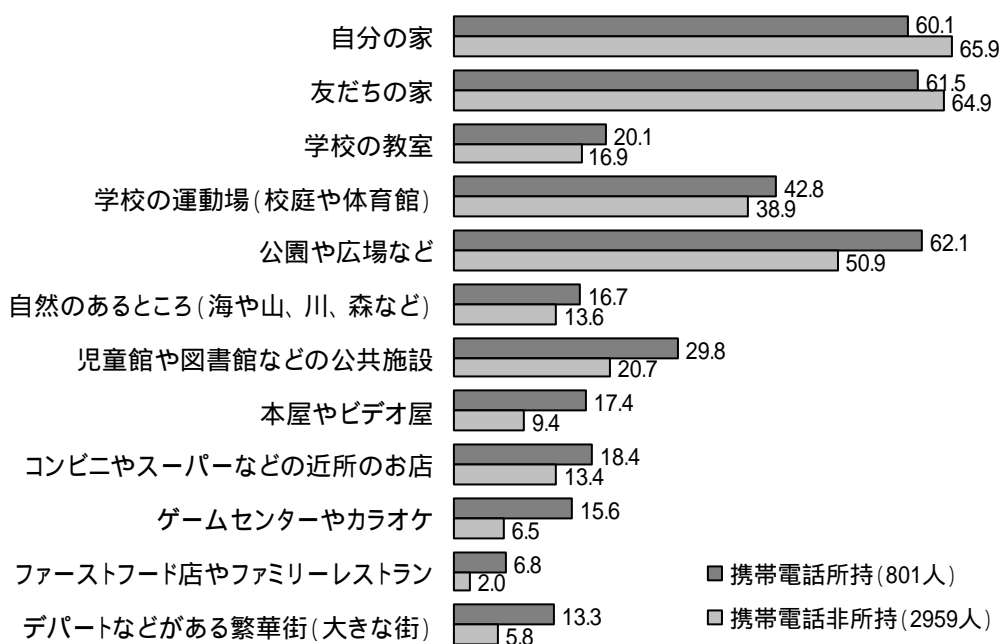
性別でみても、やはり携帯電話の所所有者と非所持者では、消費文化に近い遊び場で遊ぶ割合に 10 ポイント以上の差がみられた（図は省略）。男子・女子の双方で開きがあったのは、「本屋やビデオ屋」「コンビニやスーパーなどの近所のお店」「ゲームセンターやカラオケ」である。

こうした普段の生活スタイルの相異は、お金の使い道にも表れている（図 2 - 2 - 7 ~ 図 2 - 2 - 8）。とくに中学生で顕著な差がみられ、「カラオケやゲームセンター」「おしゃれに必要なもの（服や化粧品など）」「交通費」「食べ物・飲み物・おかし」「携帯電話（PHS）」などについて、携帯電話所持者の方が回答した割合が高くなっていることがわかる。携帯電話の有無とお金の使い道で差が見られた項目は、趣味や社交のための消費財とみなすことができる。ここからも、携帯電話と子どもたちの生活との関連を見出せるだろう。

以上からは、携帯電話を所持する子どもは、とくに行動範囲が広がる中学生段階になると、消費文化に近い場所で遊び、それに応じたお金の使い方をする特徴があることがわかる。

図 2 - 2 - 5 小学生：放課後に遊ぶ場所（携帯電話所持別）

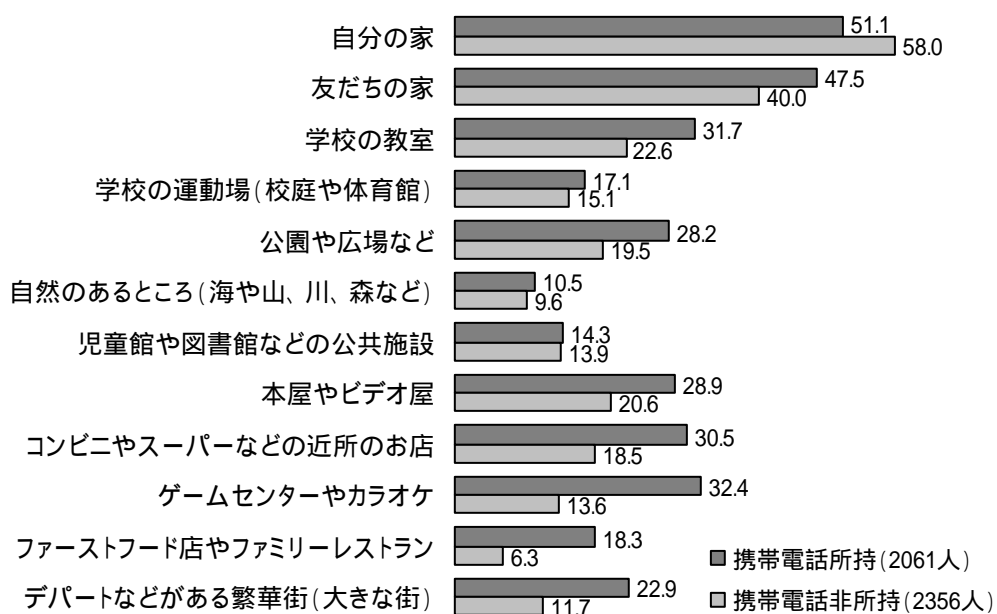
(%)



* 「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計(%)。

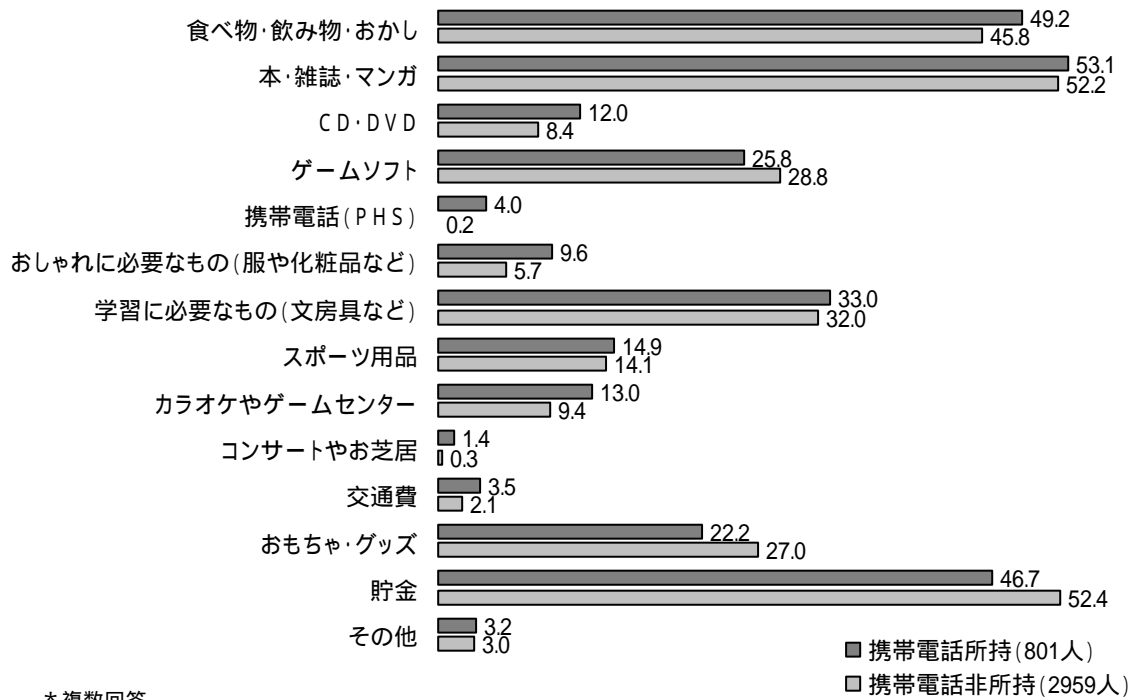
図 2 - 2 - 6 中学生：放課後に遊ぶ場所（携帯電話所持別）

(%)



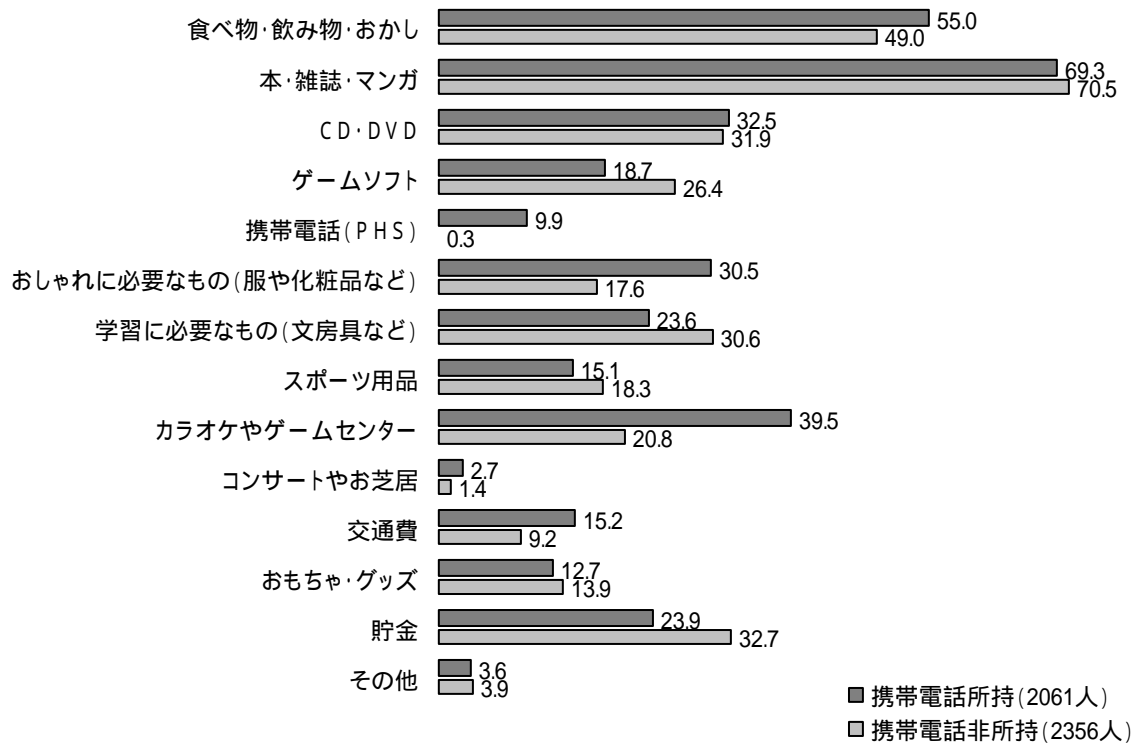
* 「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計(%)。

図 2 - 2 - 7 小学生：お金の使い道（携帯電話所持別）（％）



* 複数回答。

図 2 - 2 - 8 中学生：お金の使い道（携帯電話所持別）（％）



* 複数回答。

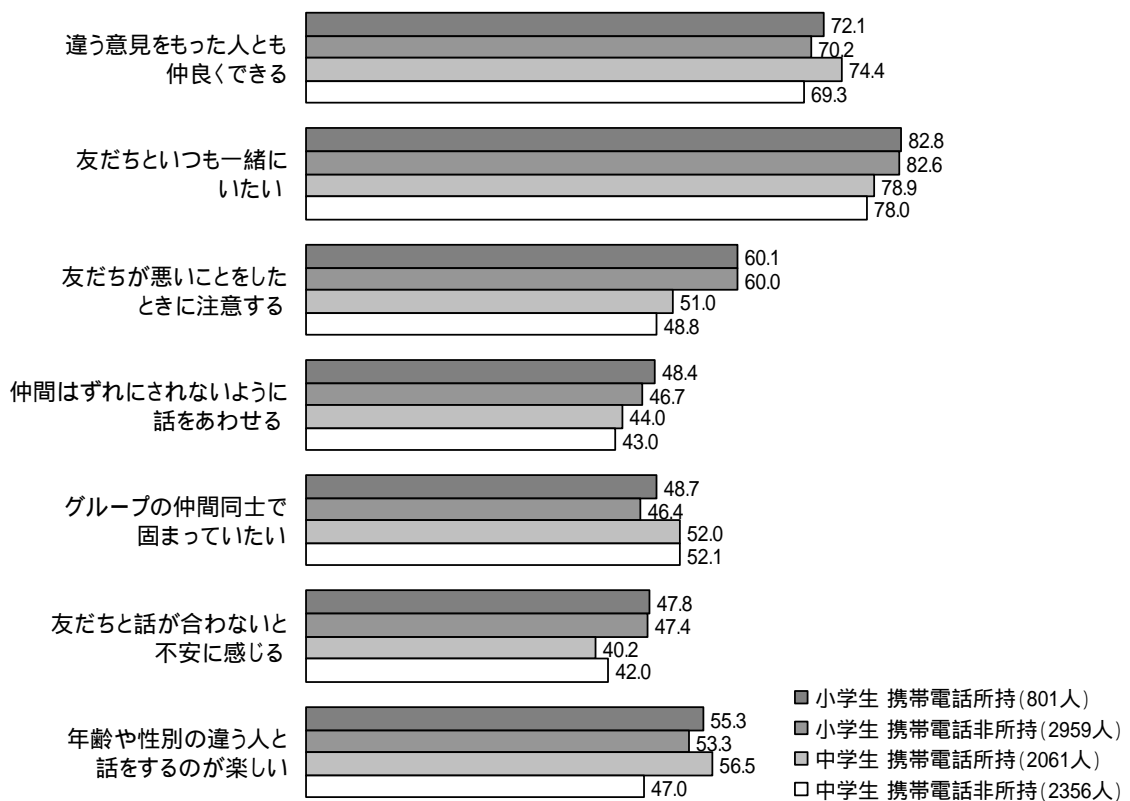
(5) 携帯電話を所持する子どもの特徴：人間関係

友だち関係

さらに、携帯電話の所持状況と子どもの人間関係との関連をみてみよう。図2 - 2 - 9には、携帯電話の所持別、学校段階別に友だち関係を表す項目において、「とてもそう」と「まあそう」の合計の比率が示されている。携帯電話の所持者の方がわずかながら比率が高くなっている項目が全体として多いが、ほとんど差は見られない。

項目のなかで唯一、両者で差が開いているのは、「年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい」についての中学生の意見である。携帯電話を所持する中学生は56.5%が肯定しているのに対して、所持していない中学生は47.0%である。携帯電話を所持する中学生は、所持しない中学生と比べて、異なる年齢、性別の人との話を楽しむ傾向が表れている。

図2 - 2 - 9 友だちとの関係（学校段階別、携帯電話所持別） (%)



* 「とてもそう」と「まあそう」の合計(%)

異性とのつきあい

友だち関係のなかでも異性との交際（この項目は中学生のみ回答）については、携帯電話の所持者と非所持者の違いが明らかである。所持者の方が「異性とのつきあい経験」がある割合が高い（表 2 - 2 - 3）。つきあっている異性が「いる」と回答したのは、携帯電話所持者 12.6%、携帯電話非所持者 7.3%である。さらに、「以前はいたが今はいない」と回答したのは、所持者 24.0%、非所持者 14.6%である。性別をわけて見ても、携帯電話所持者の方が「異性とのつきあい経験」がある割合が高かった（図省略）。

表 2 - 2 - 3 中学生：異性とのつきあい経験（携帯電話所持別）（％）

	中学生	
	携帯電話所持	携帯電話非所持
	(2061人)	(2356人)
いる	12.6	7.3
以前はいたが今はいない	24.0	14.6
いたことがない	50.2	73.9
無回答・不明	13.2	4.2

* 中学生のみ回答。

親子関係

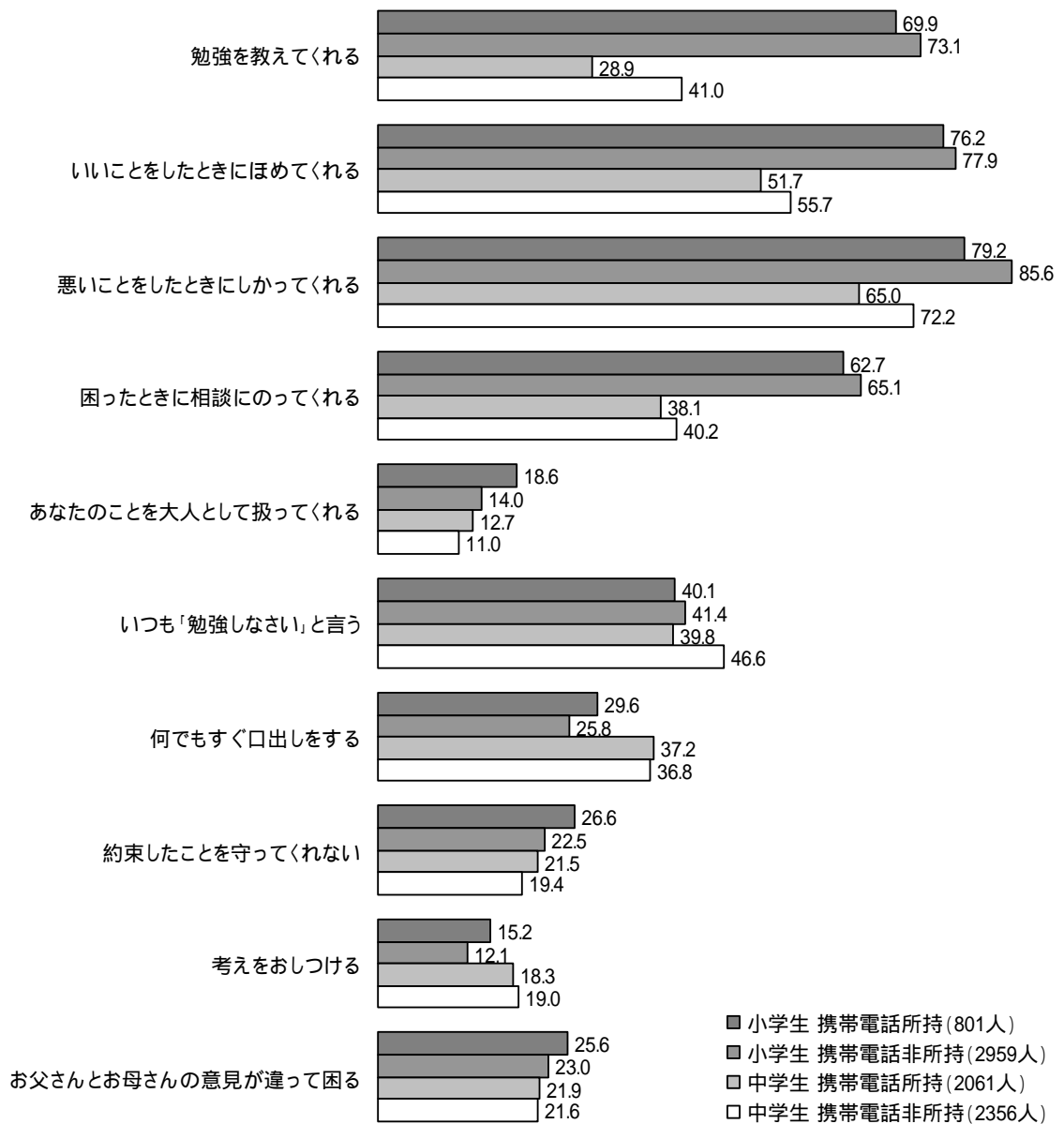
続いて、親子関係についてたずねた項目を見てみよう。図2 - 2 - 10は、親からの働きかけについて聞いたもので、各項目に「あてはまる」ものを選んでもらった比率（複数回答）を学校段階別に示している。

小学生では、携帯電話を所持していないケースで、「悪いことをしたときにしかってくれる」と回答した比率が高いが、項目全般にわたって大きな差は見られない。携帯電話を所持しているかどうかで、親のかかわりはそれほど変わらないように見える。

これに対して、中学生では、携帯電話所持者に「勉強を教えてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」「いつも『勉強しなさい』と言う」などの比率が低い。中学生では携帯電話を所持している者の方が、親からはたらきかけの場面が少ない傾向にあるようだ。

このように、子どもが携帯電話をもつかどうかは、親の子どもとの接し方や教育の方針などと関連している可能性がある。

図 2 - 2 - 10 親との関係（学校段階別、携帯電話所持別）（％）



* 複数回答。

(6) 携帯電話を所持する子どもの特徴：生活時間

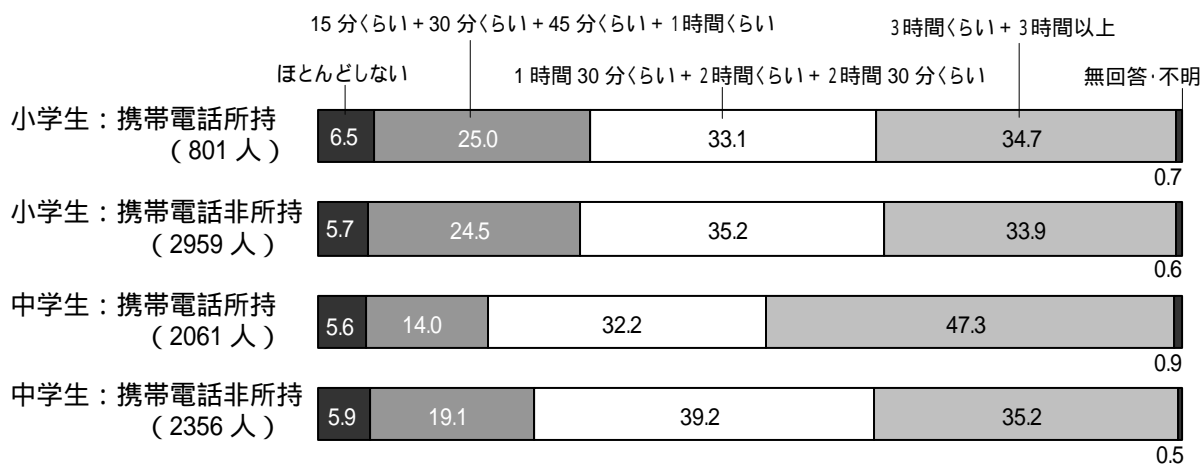
最後に、携帯電話の所持状況と他のメディアとの関連、および学習状況との関連について概観したい。

テレビ・ビデオ(DVD)の視聴時間

テレビやビデオ(DVD) およびテレビゲームは、従来からメディアの主流として、子どもたちの生活との密着性が注目されてきた。そこに携帯電話やパソコンなどの新しいメディアが登場したが、各メディアに費やされる時間はどのような傾向を示しているのだろうか。図2-2-11は、平日のテレビ・ビデオ(DVD)の視聴時間を学校段階別、携帯電話の所持者・非所持者別に示したものである。

これによると、小学生は、携帯電話の有無によって、テレビ・ビデオ(DVD)の視聴時間に大きな差はみられないことがわかる。一方で、中学生では携帯電話の所持者に「3時間以上」の長時間視聴者が多く、非所持者に比べて12.1ポイント上回っていることがわかる。携帯電話をもつ中学生は、テレビ・ビデオ(DVD)などに接する時間も長いようである。

図2-2-11 テレビ・ビデオ(DVD)の視聴時間(学校段階別、携帯電話所持別)(%)



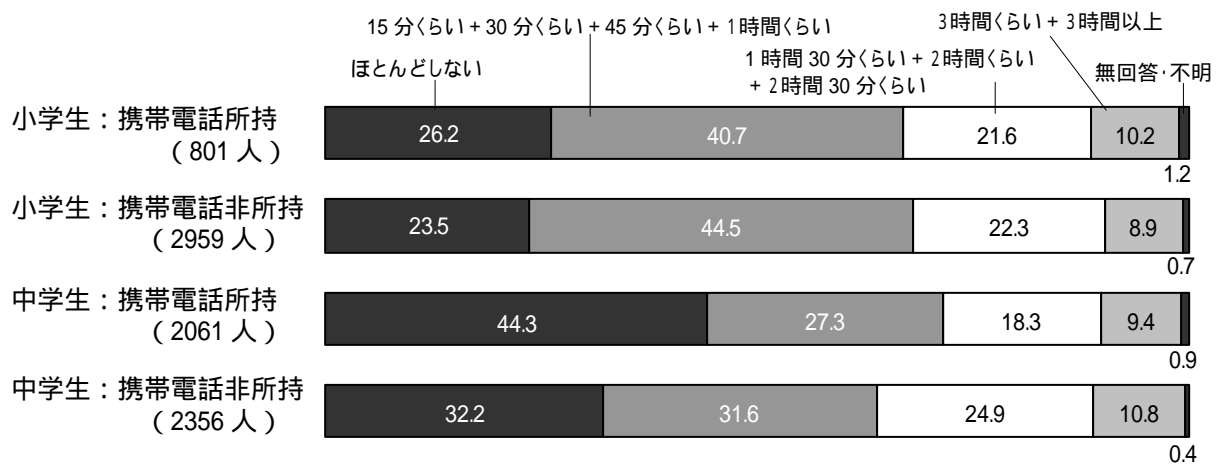
テレビゲームの時間

続いて、テレビゲームで遊ぶ時間を、学校段階別、携帯電話の所持別に示したものが、図 2 - 2 - 12 である。

特徴としてあげられるのは、テレビゲームを「ほとんどしない」割合が、学校段階が上がると増加し、小学生の携帯電話所持者 26.2%、非所持者 23.5%から、中学生の携帯電話所持者 44.3%、非所有者 32.2%になることである。小学生段階では、携帯電話の有無によって、テレビゲームで遊ぶ時間に大きな差はなく、相対的に見て長い時間を費やしている。

一方、中学生では、携帯電話をもっている者に「ほとんどしない」割合が高くなっており、携帯所持者の方がテレビゲームに費やす時間が短い傾向にある。これは、携帯所持者は女子に多い一方で、テレビゲームをする者は男子に多いために表れる傾向と推察される。

図 2 - 2 - 12 テレビゲームで遊ぶ時間（学校段階別、携帯電話所持別）（％）



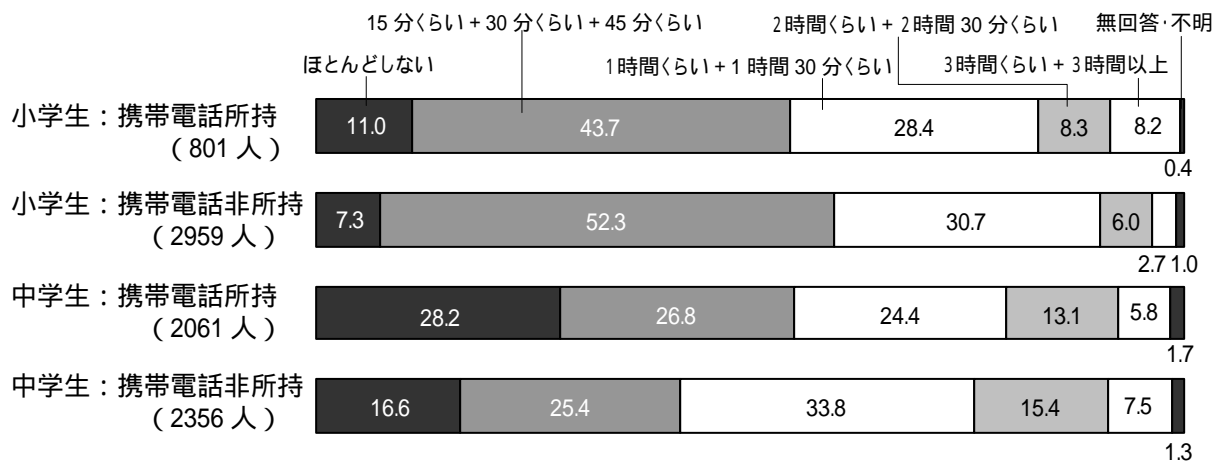
家庭学習の時間

次に、家での学習時間を見てみよう。図2 - 2 - 13は、平日（学校がある日）の学習塾や予備校を除く家での学習時間について、学校段階別、携帯電話の所持別にみた結果である。

小学生・中学生とも携帯電話所持者の方が、平日に家庭での学習を「ほとんどしない」割合が若干高い。また、平日に2時間以上学習する割合（「2時間くらい+2時間30分くらい」と「3時間以上」の合計）は、小学生の所持者で16.5%、非所持者で8.7%、中学生の所持者で18.9%、非所持者で22.9%である。興味深いことに、家での学習時間が「2時間以上」と長い者の割合は、小学生では携帯電話をもっている者の方が高くなっているが、反対に、中学生では携帯電話をもっていない者の方が高くなっている。

これに関連して、携帯電話の所有と通塾との関連について最後に触れておく。「生活実態調査」では、家や学校以外での勉強をしているかどうかをたずねている。そのなかで「学習塾や予備校に行っている」という項目については、小学生の25.1%、中学生の47.1%が「あてはまる」と回答した。これを、携帯電話の所持別にみると、小学生では、携帯電話所持者のうち通塾している割合は41.8%、非所持者のうち通塾している割合は22.0%であった。中学生では、携帯電話の所持者で通塾しているのは、53.1%、非所持者で通塾しているのは42.7%であった。このように、携帯電話所持者の方が、通塾率が高い傾向がみられるが、とくに小学生で差が大きいことがわかる。小学生は、中学受験などを控えて学習塾に通っている者が携帯電話をもっており、そのために長時間学習する者の比率が高くなっていると推察される。

図2 - 2 - 13 平日の家での学習時間（学校段階別、携帯電話所持別）（％）



3 . 小・中学生のパソコンの利用状況

(1) パソコンの利用状況

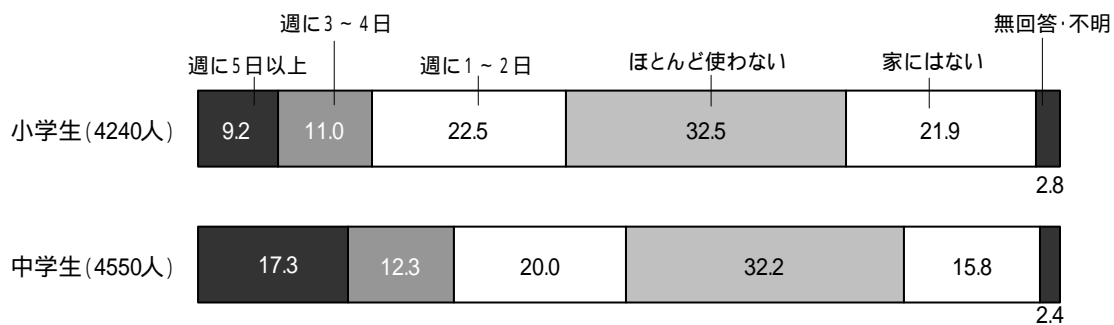
前節では、携帯電話の利用状況について検討した。続いて、本節ではパソコンの利用状況について検討していこう。

はじめに、「生活実態調査」の結果から、小・中学生のパソコン利用状況を確認しよう。「あなたは、一週間にどれくらいパソコンを使いますか」とたずねた結果を、学校段階別に、図 2 - 3 - 1 に示した。ここでは家でパソコンを利用する頻度を取り上げている。

この結果に依拠すれば、小・中学生とも 8 割程度の家庭にパソコンがあることがわかる。利用頻度を細かくみると、家でパソコンを「週に 5 日以上」利用している割合は、小学生 9.2%、中学生 17.3%とそれほど多くはないものの、1 週間のうち 1 日でもパソコンを利用する割合（「週に 5 日以上」と「週に 3 ~ 4 日」と「週に 1 ~ 2 日」の合計）は、小学生 42.7%、中学生 49.6%になる。この結果から、小学生では約 4 割が、中学生では約半数が、家でパソコンを使っていることがわかる。

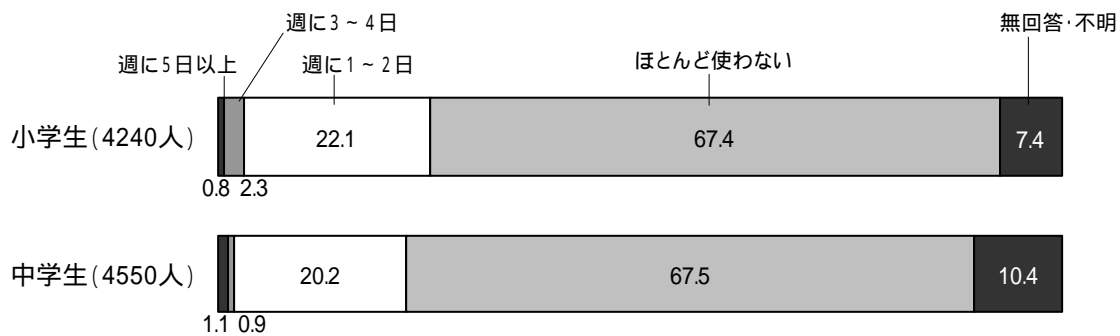
次に、学校での利用状況を、図 2 - 3 - 2 に示した。これを見ると、学校で利用しているのは 2 割台で、約 7 割が学校では「ほとんど使わない」と回答している。学校での利用頻度は、それほど高くないようだ。

図 2 - 3 - 1 家でパソコンを利用する頻度（学校段階別）（％）



*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

図 2 - 3 - 2 学校でパソコンを利用する頻度（学校段階別）（％）



*ベネッセ教育研究開発センター，2005，『第1回子ども生活実態基本調査報告書』より。

(2) パソコンの利用内容

次に、小・中学生がパソコンをどのようなことに利用しているかを見ていこう。

以下では、主に家庭での利用内容について、家で 1 日以上利用する者に注目して検討する。なお、家庭での利用頻度について、「週に 5 日以上」「週に 3 ~ 4 日」「週に 1 ~ 2 日」のいずれかを回答した者を「パソコン利用者」、「ほとんど使わない」「家にはない」を選択した者を「パソコン非利用者」として分析した。図 2 - 3 - 3 が小学生の結果、図 2 - 3 - 4 が中学生の結果である。各図では、全体の傾向を比較考量するため、小学生全体ならびに中学生全体の割合も示している。

最初に、小学生の傾向について見てみよう。

小学生のパソコン利用者でもっとも多いのは、「ゲームをする」(80.2%) である。ただし、これがパソコンゲームソフトなのか、オンラインゲームなのかはわからない。次に、「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」(60.9%)、「インターネットで勉強のことを調べる」(45.2%) が続く。小学生でもパソコン利用者は、インターネットをよく利用し、自分の興味や勉強に関わる事柄を検索しているようだ。インターネットのメリットと考えられる、情報へのアクセスのしやすさが、小学生の利用を促しているであろう。そして以下、「絵を描く」(39.7%)、「文章を書く」(32.8%) という機能が続く。

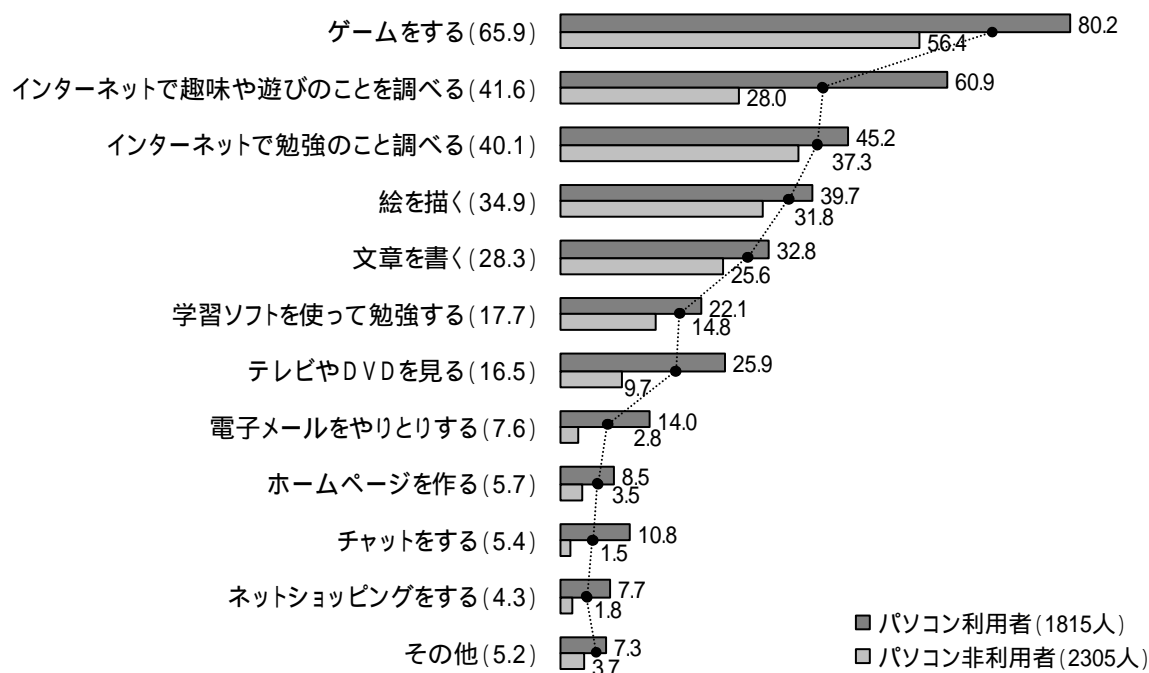
一方で、「電子メールをやりとりする」(14.0%)、「チャットをする」(10.8%)、「ホームページを作る」(8.5%) といった内容については、数パーセントから 1 割程度である。パソコン利用者でも、インターネットを双方向的なコミュニケーションツールとして利用したり、自ら情報発信するツールとしたりする割合は低い。

次に、中学生の傾向をみてみよう。

中学生のパソコン利用者は、「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」(83.9%) が圧倒的に多い。趣味や娯楽の情報を WEB ページの閲覧によって収集しているようだ。膨大な量の WEB ページを検索し、自分の必要とする情報にアクセスするという行為は、パソコンを利用している中学生はほぼできると考えてよいだろう。次いで、「ゲームをする」(58.8%) が続く。ゲーム目的の利用が多いのは、小学生と同様の傾向である。

さらに、中学生では「電子メールのやりとりをする」が 43.8% となっており、パソコン利用者の 4 割がコミュニケーション手段として利用していることがわかる。また、「チャットをする」(24.1%)、「ホームページを作る」(11.4%) などの比率も、小学生より高い。中学生段階では、こうしたコミュニケーションや情報発信の手段としてパソコンを利用する傾向を強めていくことがわかる。

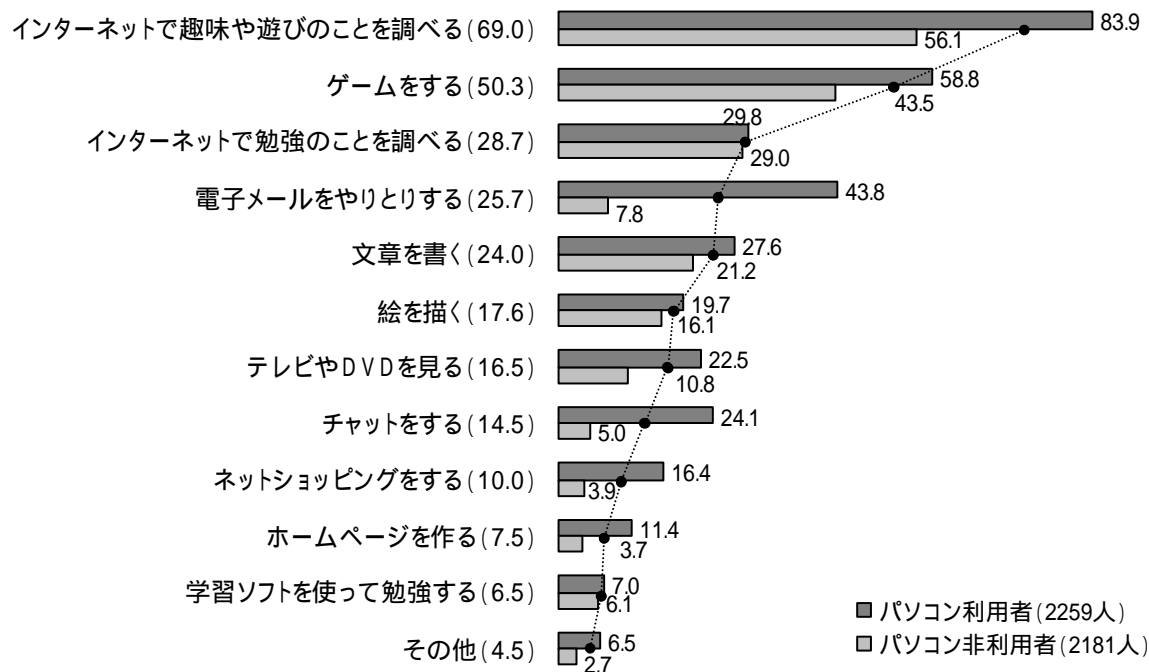
図2-3-3 小学生：パソコンですること（パソコン利用頻度別）（％）



* 複数回答。()内の数値および点線は全体を示す。

* 「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者、「パソコン非利用者」は「ほとんど使わない」「家にはない」と回答した者を示す。

図2-3-4 中学生：パソコンですること（パソコン利用頻度別）（％）



* 複数回答。()内の数値および点線は全体を示す。

* 「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者、「パソコン非利用者」は「ほとんど使わない」「家にはない」と回答した者を示す。

表 2 - 3 - 1 は、パソコンの利用内容について、パソコン利用者が「あてはまる」と回答した割合を、学校段階別、性別に示したものである。

性別を分けると、小・中学生とも男子より女子の方が、「絵を描く」「文章を書く」割合が多く、いずれも 10 ポイント以上の差がある。さらに、「ホームページを作る」「電子メールをやりとりする」といった項目では、中学生女子の割合が高くなっており、彼女たちがインターネットを用いた情報のやり取りや情報発信を好んで行っていることがわかる。逆に、男子の方が女子より多かった項目として、小学生では「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」が、中学生では「ゲームをする」があげられる。

表 2 - 3 - 1 パソコン利用者：パソコンですること（学校段階別、性別）（％）

	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
	(903 人)	(910 人)	(1134 人)	(1114 人)
文章を書く	25.4	40.3	21.4	34.1
絵を描く	30.1	49.2	12.3	27.6
ゲームをする	80.3	80.2	66.0	51.4
テレビやDVDを見る	25.6	26.2	21.9	23.2
インターネットで勉強のことを調べる	40.0	50.3	29.2	30.8
インターネットで趣味や遊びのことを調べる	64.7	57.3	84.3	83.5
学習ソフトを使って勉強する	20.8	23.4	7.2	6.8
ホームページを作る	8.6	8.5	8.5	14.5
チャットをする	11.2	10.4	21.4	26.7
電子メールをやりとりする	9.1	18.9	32.5	55.7
ネットショッピングをする	8.7	6.6	16.7	16.0
その他	7.4	7.3	6.7	6.2

*複数回答。

*「パソコン利用者」の数値のみ掲載。

*「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者。

(3) パソコンの利用に関する意識

それでは、子どもたちはパソコンに対して、どのような意識やイメージを有しているのだろうか。パソコンについてあてはまること、感じていることについて、パソコン利用者と非利用者に分けて示したのが、図2-3-5と図2-3-6である。「パソコン利用者」とは、前項と同様に、家での1週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかの回答をした者を指す。また、「パソコン非利用者」とは、同じ設問で「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかの回答をした者を指す。なお、ここでは、「とてもそう」と「まあそう」の合計の割合が示されている。

結果を一見してわかるのは、パソコン利用者が、すべての項目で高い比率を示していることである。「パソコンを使うのが楽しい」という意識は、小・中学生ともパソコン利用者では9割を超えている。さらに、「パソコンをもっと使いこなせるようになりたい」「パソコンがないと今の生活が不便になると思う」の割合についても、パソコン利用者の方が高い。ここから、パソコンに触れる機会の多さとパソコンに対する意識には関連があることがわかる。

しかしながら、「パソコンで調べたことについて親とよく話をする」について、小・中学生の違いをみると、小学生のパソコン利用者では50.1%であるのに対し、中学生のパソコン利用者では25.3%とほぼ半減している。データからはわからないが、小学生の場合には、パソコンを利用した後に親と話をするといった状況のほか、子どもがパソコンを利用する際に親がついており、そのときに自然と親との会話がなされている、といった状況も考えられるだろう。一方、子どもが成長して中学生になると、親が子どものパソコンの利用について管理できない状況が生まれてしまう可能性がある。

また、「インターネットの使い方についてのマナーやルールを知っている」のは、小学生のパソコン利用者で57.1%、中学生で68.3%である。しかしながら、非利用者だと、小学生では26.1%、中学生では36.1%にとどまる。インターネットは不特定多数の人々が活動する一種のネットワーク社会であり、そこでは一定のマナーやルールが求められる。インターネットに関連した犯罪や危険性が指摘されて久しいが、日ごろはパソコンに触れない子どもも含めて、子どもたちにインターネットを利用する際のマナーやルールを身につけさせる取り組みを行う必要があるだろう。

そのうえ、パソコンの利用者と非利用者では、「パソコンを使うこと」が得意かどうかをたずねた質問でも差が見られた(図省略)。「パソコンを使うこと」が「得意である」「とても得意」と「やや得意」の合計)と回答した小学生は、パソコン利用者では84.8%であったのに対し、非利用者では51.6%であった。また、中学生でも、パソコン利用者では80.2%、非利用者では36.5%で、パソコンを利用している者の方が、パソコンを得意ととらえていた。このように、日ごろのパソコンへの接し方によって、パソコンに対する意識には違いがあることがわかる。

図 2 - 3 - 5 小学生：パソコンについてあてはまること（パソコン利用頻度別）（％）

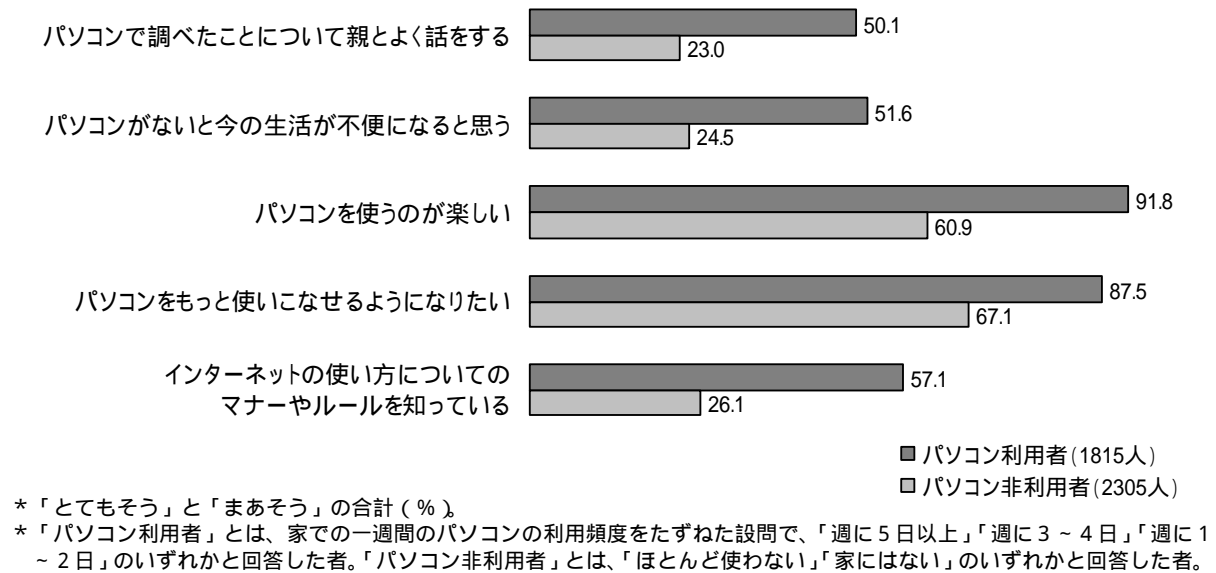
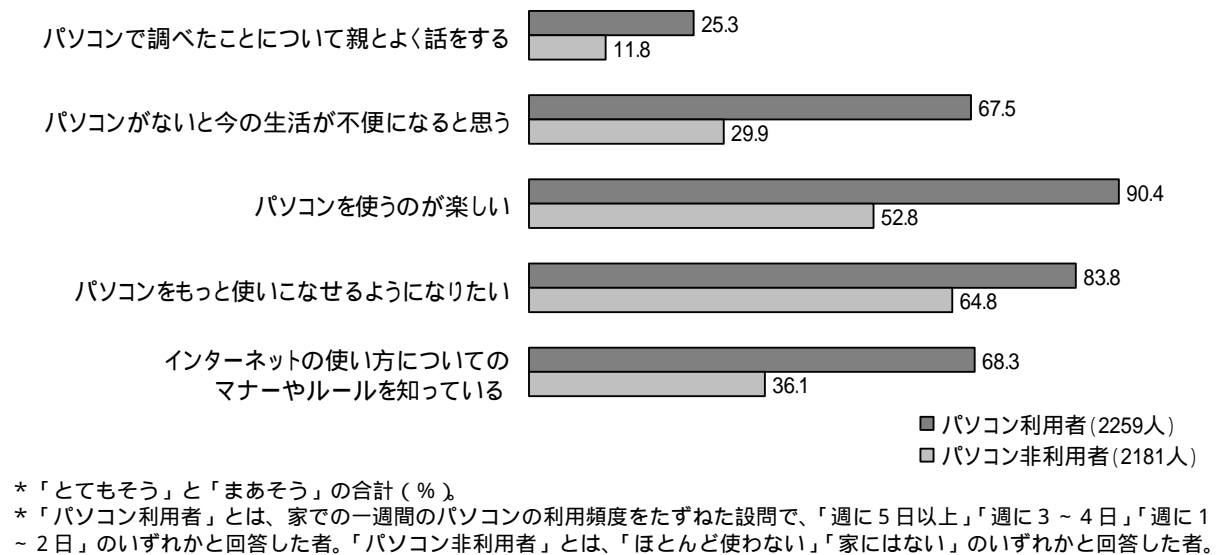


図 2 - 3 - 6 中学生：パソコンについてあてはまること（パソコン利用頻度別）（％）



4. パソコンの利用と携帯電話の利用の関連性

(1) パソコンの利用頻度別にみた携帯電話の所持率

ここまで、子どものパソコンと携帯電話のそれぞれについて、利用状況をみてきた。そこで、本節では、パソコンと携帯電話の利用状況の関連についてみていきたい。これらの間には何らかの関連性や傾向があるのだろうか。

はじめに、パソコンの利用頻度別に携帯電話の所持状況を見た結果を示す(表2-4-1)。この結果からは、パソコンの利用頻度と携帯電話の所持・非所持には、大きな関連がないことが読み取れる。小学生においては、パソコンの利用頻度にかかわらず携帯電話の所持率は2割程度である。ただし、中学生では、家でパソコンを利用していない者のほうが7.2ポイント高い。パソコンを好んで使う者と携帯電話のほうを好んで使うものに、やや分かれる傾向が表れている。

それでは、さらに性別にわけてみるとどうだろうか。表2-4-2によると、小学生では男子も女子も、パソコンを家で利用するかどうかによって、携帯電話を所持している割合には差がない。また、中学生の男子でも差はみられない。しかし、中学生の女子では、パソコン非利用者のほうが利用者よりも、携帯電話を所持する割合が高いという傾向がみられる。

表2-4-1 携帯電話所持率(学校段階別、パソコン利用頻度別)(%)

	小学生	中学生
パソコン利用者	20.2	41.7
パソコン非利用者	17.9	48.9

*小学生：パソコン利用者(1815人) パソコン非利用者(2305人)

*中学生：パソコン利用者(2259人) パソコン非利用者(2181人)

*携帯電話を「もっている」の%。

*「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3~4日」「週に1~2日」のいずれかと回答した者。「パソコン非利用者」とは、「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかと回答した者。

表2-4-2 携帯電話所持率(学校段階別、性別、パソコン利用頻度別)(%)

	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
パソコン利用者	17.6	22.6	37.9	45.2
パソコン非利用者	15.2	20.9	40.0	57.6

*小学生男子：パソコン利用者(903人) パソコン非利用者(1198人)

*小学生女子：パソコン利用者(910人) パソコン非利用者(1105人)

*中学生男子：パソコン利用者(1134人) パソコン非利用者(1088人)

*中学生女子：パソコン利用者(1114人) パソコン非利用者(1086人)

*携帯電話を「もっている」の%。

*「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3~4日」「週に1~2日」のいずれかと回答した者。「パソコン非利用者」とは、「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかと回答した者。

(2) 携帯電話の所持別にみたパソコンの利用内容

続いて、携帯電話の所持別にパソコンの利用内容を概観したい。携帯電話もパソコンもインターネットやメールなど、相互に重なる機能を持ち合わせている。その一方で、手軽さに優る携帯電話と、さまざまなツールを搭載するパソコンには異なる機能もある。双方のメディアを子どもたちはどのように利用しているのだろうか。

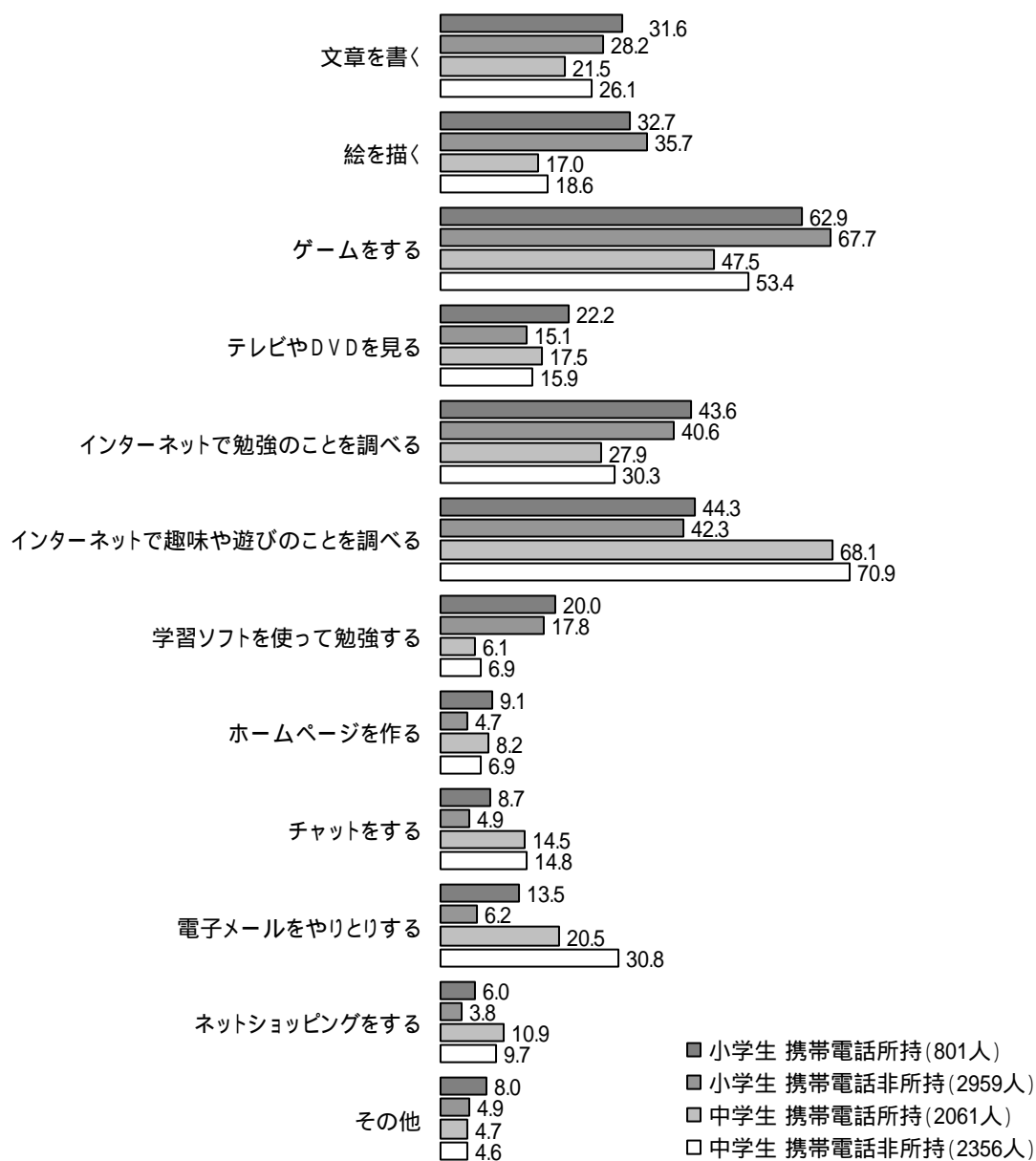
まず、携帯電話の所持者・非所持者別に、家でのパソコンの利用頻度をみた。しかしながら、小・中学生ともに大きな差はみられなかった(図省略)。

次に、パソコンの利用内容についてみてみよう。図 2 - 4 - 1 で差が見られた項目を順に確認すると、小学生の場合、「電子メールをやりとりする」(携帯電話所持者 13.5% > 非所持者 6.2%、以下同様) や、「テレビやDVDを見る」(22.2% > 15.1%) については、携帯電話所持者のほうが非所持者よりも多かった。これとは逆に、「ゲームをする」は携帯電話所持者のほうが非所持者よりも少ない傾向がみられた(62.9% < 67.7%)。

他方、中学生の場合、「電子メールをやりとりする」(20.5% < 30.8%) や、「ゲームをする」(47.5% < 53.4%) 「文章を書く」(21.5% < 26.1%) などの項目で、携帯電話所持者よりも非所持者で選択する割合が高かった。このように小学生と中学生では異なる傾向がみられる。

「電子メールをやりとりする」については、中学生の場合、携帯電話所持者と非所持者との差となっていて、10.3 ポイントの差となっている。また、「文章を書く」についても、携帯電話所持者より、非所持者のほうが高くなっている。こうしたことから、携帯電話を所持していない中学生は、パソコンにおいて電子文字を活用する機能を積極的に利用しているようだ。とくに、パソコンによる電子メールのやりとりは、携帯電話のメールに代替するものとして、コミュニケーション手段としての役割を担っているとも考えられるだろう。

図2-4-1 パソコンですること（学校段階別、携帯電話所持別）（％）



* 複数回答。

(3) 家庭環境の影響

携帯電話の利用について

ここでは、携帯電話の所持状況やパソコンの利用頻度、利用内容が、家庭環境と何らかの関連があるのかを考察する。

表 2 - 4 - 3 は、携帯電話の所持状況別に、家庭環境をたずねた各項目を選択した割合を学校段階ごとに示したものである。

第一に、親のパソコン利用状況との関係では、「家でお父さんはパソコンを使う」を選択した割合は、中学生で携帯電話所持者よりも携帯電話非所持者で高い。

第二に、親の学歴との関係については、小学生と中学生で異なる傾向が見られる。差はそれほど大きくはないものの、小学生では、携帯電話所持者の方が「お父さん（お母さん）は大学や短期大学を卒業している」を選択した割合が高い。しかし、中学生になると、これとは逆に、携帯電話非所持者の方が選択率が高くなっている。親の学歴状況が子どもの携帯電話の所持にどのように影響しているのかは定かではないものの、学校段階別で傾向が逆転していることは興味深い。

第三に、家族関係については、「おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいる」「きょうだいがいる」という項目で、携帯電話非所持者の方が選択する割合が高い傾向がみられる。換言すれば、携帯電話非所持者には、祖父母と同居している者や兄弟がいる場合が多いと推測できる。携帯電話の所持には、家族構成や家族関係が関連しているのかもしれない。

第四に、小学生において、携帯電話所持者は、非所持者に比べて、「自分ひとりの勉強部屋を持っている」と回答した割合が高い。

表 2 - 4 - 3 家庭環境（学校段階別、携帯電話所持状況）（ % ）

	小学生		中学生	
	所持者	非所持者	所持者	非所持者
	(801 人)	(2959 人)	(2061 人)	(2356 人)
家でお父さんはパソコンを使う	47.8	51.9	41.5	54.2
家でお母さんはパソコンを使う	38.7	35.2	28.3	32.7
自分ひとりの勉強部屋を持っている	42.7	35.5	58.2	57.8
お父さんは大学や短期大学を卒業している	30.1	26.2	29.3	39.0
お母さんは大学や短期大学を卒業している	27.5	23.1	26.5	33.0
おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいる	27.3	30.7	28.1	38.6
きょうだいがいる	73.2	84.8	80.3	88.4

* 複数回答。

パソコンの利用について

それでは、家庭環境とパソコンの利用頻度の関係はどのようになっているのだろうか。表 2 - 4 - 4 は、家でのパソコンの利用頻度別に、家庭環境をたずねた各項目を選択した割合を学校段階ごとに示したものである。

表からは、以下のようなことがわかる。

第一に、親のパソコン利用状況と子どものパソコン利用頻度に、明確な関連を見出すことができる。「家でお父さん(お母さん)はパソコンを使う」を選択した割合は、小・中学生ともに、家でパソコンを使っている子どもの方が、そうでない子どもよりも明らかに高い。これは家庭で親がパソコンを利用している場合、子どももパソコンを使える環境が整っているということが考えられる。

第二に、親の学歴との関係を見ると、「お父さん(お母さん)は大学や短期大学を卒業している」を選択した割合は、小・中学生ともに、パソコン利用者が高いことがわかる。親の学歴状況は、子どものパソコン利用頻度に関連を有していると思われる。

表 2 - 4 - 4 家庭環境とパソコンの利用頻度(学校段階別、パソコン利用頻度別)(%)

	小学生		中学生	
	利用者	非利用者	利用者	非利用者
	(1815 人)	(2305 人)	(2259 人)	(2181 人)
家でお父さんはパソコンを使う	70.7	35.4	62.5	34.3
家でお母さんはパソコンを使う	53.6	21.8	44.4	17.4
自分ひとりの勉強部屋を持っている	42.9	32.4	62.3	53.5
お父さんは大学や短期大学を卒業している	34.0	20.9	41.8	27.6
お母さんは大学や短期大学を卒業している	30.2	19.0	36.7	23.5
おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいる	28.7	30.4	36.4	31.7
きょうだいがいる	82.3	83.0	84.8	84.8

* 複数回答。

* 「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者。「パソコン非利用者」とは、「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかと回答した者。

母親の就労状況の影響

最後に、母親の就労状況と携帯電話の所持状況、および家でのパソコン利用頻度との関係について見ておこう（表 2 - 4 - 5、表 2 - 4 - 6）。

まず、携帯電話の所持状況別に、母親の就労状況の違いをみると、携帯電話所持者の方が「専業主婦（たいてい家にいて家族の世話をしている）」の母親の割合がわずかながら低くなっているものの、その差は大きくない。

次いでパソコンの利用頻度別に、母親の就労状況の違いをみたが、これについて数値の差はほとんど見られない。

表 2 - 4 - 5 小学生：母親の就労状況と携帯電話の所持・パソコンの利用（％）

	携帯電話		パソコン	
	所持者	非所持者	利用者	非利用者
	(801 人)	(2959 人)	(1815 人)	(2305 人)
常勤 (朝から夕方まで仕事をしている)	42.1	43.2	44.0	42.9
専業主婦 (たいてい家にいて家族の世話をしている)	17.9	21.9	21.4	20.5
パートやフリー (内職やパートの仕事をしている)	15.5	16.9	18.1	15.4
無回答・不明	24.6	18.0	16.6	21.2

* 「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者。「パソコン非利用者」とは、「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかと回答した者。

表 2 - 4 - 6 中学生：母親の就労状況と携帯電話の所持・パソコンの利用（％）

	携帯電話		パソコン	
	所持者	非所持者	利用者	非利用者
	(2061 人)	(2356 人)	(2259 人)	(2181 人)
常勤 (朝から夕方まで仕事をしている)	46.0	44.6	44.1	46.8
専業主婦 (たいてい家にいて家族の世話をしている)	12.8	16.6	16.0	13.4
パートやフリー (内職やパートの仕事をしている)	23.4	23.3	23.9	22.7
無回答・不明	17.8	15.5	16.0	17.1

* 「パソコン利用者」とは、家での一週間のパソコンの利用頻度をたずねた設問で、「週に5日以上」「週に3～4日」「週に1～2日」のいずれかと回答した者。「パソコン非利用者」とは、「ほとんど使わない」「家にはない」のいずれかと回答した者。

まとめ

各節の知見を要約し、本章のまとめを行おう。

第1節では、本章で用いた調査、ベネッセ教育研究開発センターが2004年に行なった「第1回子ども生活実態基本調査」(以下、「生活実態調査」)の概要を整理した。

第2節では、「生活実態調査」を再分析し、小・中学生の携帯電話の利用に関する実態を明らかにした。小学生の携帯電話所持率は18.9%、中学生の携帯電話所持率は45.3%であった。小学生の場合、その利用目的は家族とのコミュニケーションが中心だが、中学生の場合は「友だちに送るメール」という利用がもっとも多い。携帯電話を所持している子どもたちは、「携帯電話を使うのが楽しい」「携帯電話がないと今の生活が不便になると思う」などの項目に肯定的な回答を寄せている。

さらに、携帯電話を利用している者の特徴を検討すると、以下のような傾向がみられた。第一に、携帯電話を所持している児童・生徒は消費文化への接触が非所持者よりも多い。第二に、携帯電話の所持・非所持別で友人関係に大きな差はみられなかったが、異性との交際経験では、携帯電話所持者の方がその割合が高かった。第三に、親子関係については、携帯電話非所持者で親の具体的ななかかわりを肯定的にとらえる割合が高かった。第四に、テレビ・ビデオ(DVD)の視聴時間については、中学生の携帯電話所持者に特徴がみられ、「3時間以上」の長時間視聴者の割合がもっとも高かった。さらに、学習時間については、小・中学生とも携帯電話所持者の方が、平日の家庭学習を「ほとんどしない」割合が若干高い。

以上のような状況を総括すると、携帯電話を所持する子どもは、消費文化に近い、テレビ・ビデオの視聴時間が長い、学習時間が短いといった傾向を有していることがわかる。

第3節では、同じく「生活実態調査」を基に、小・中学生のパソコン利用の実態を明らかにした。家でパソコンを利用する頻度をたずねた結果、1週間のうち1日でもパソコンを利用するのは、小学生で42.7%、中学生で49.6%であることが明らかとなった。パソコンの利用目的をみると、小学生と中学生では異なる傾向がみられた。小学生では、「ゲームをする」ことが中心であるが、中学生では、「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」ことが利用目的の中心となっている。さらに、子どもたちのパソコンに対するさまざまな意識は、パソコンを利用する頻度の高い者(パソコン利用者)の方が高いことがわかった。ふだんからパソコンに触れる機会が多いほど、パソコンについて肯定的にとらえている。日ごろのパソコンへの接し方によって、パソコンに対する意識には違いがあることがわかる。

以上を踏まえ、第4節では、携帯電話の所持状況とパソコンの利用状況の相互関係について考察した。パソコンの利用頻度と携帯電話の所持状況をクロスさせた結果、両者には際立った関連はあまり見られなかったが、中学生の女子においては、パソコン非利用者の方が、利用者よりも、携帯電話所持率が約10ポイント程度上回っていた。

次に、携帯電話の所持別にパソコンの利用内容をみると、中学生の携帯電話非所持者で、

「文章を書く」、「電子メールをやりとりする」の項目の割合が所持者よりも高く、子どもたちは、パソコンの電子文字機能を積極的に利用していることがわかる。

家庭環境と携帯電話の所持状況では、「おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいる」、「きょうだいがいる」という項目で、携帯電話非所持者の方が「あてはまる」と回答する割合が高いという傾向がみられた。一方、家庭環境とパソコンの利用頻度状況では、パソコン利用者の方が、「家でお父さん（お母さん）はパソコンを使う」、「お父さん（お母さん）は大学や短大を卒業している」という項目に「あてはまる」と回答する割合が高く、家庭の文化的な背景が影響している様子が見えてきた。